

The House of Mirth における主人公の 仮面の象徴的言動考察 (Ⅱ)

上 田 み どり*

広島経済大学研究論集第23巻第3号において、上記タイトルの(Ⅰ)を、作品前半を中心に考察し発表した。今回は上記作品の後半を中心に考察し、結論につなげてゆきたいと思う。

1905年にイーディス・ウォートン [Edith Wharton (1862–1937)] が発表した *The House of Mirth* (『歓楽の館』) の主人公リリー・バート (Lily Bart) はアメリカの伝統的社会規範に従い、ニューヨークの富裕階級の思考を遵奉できず、自らの命を絶ってしまうという極限に至る無垢なアメリカ娘の典型を表象している。これはアメリカ資本主義経済勃興の犠牲者を演じているように思われる。前回の(Ⅰ)の中ではイーディス・ウォートンの手本であった、ヘンリー・ジェームス [Henry James (1843–1916)] の作品の女性主人公のように、ウォートンが慣れ親しむ、ヨーロッパ文化に準拠するオールドニューヨークの、上流社会の文化的異質性を体现する女性を中心に描かれる。その主人公リリー・バートが、十九世紀から二十世紀へ移行する新しい流れに逆らい、砕け散ることになるまでの彼女の心の有り様を描写し、その特異性を指摘した。当時のアメリカ経済社会を体现する典型的例である、よい血筋と由緒ある名前を持った家柄ではない、新興成金を表象する既婚男性ローズデール (Rosedale) に抵抗し、自立した富の生産者側に立たないで、心の解放を求める、彼女の文化的そして社会的行動様式をこれまで検証した。

こうしたアメリカの歴史上、社会的にも経済的にも転換期を社会背景とする主人公の生きて行く営みが、アメリカという国の成長と重なり見えてくるように思われる。国の幼年期を過ぎ、ヨーロッパ的成熟さに移行する痛みを余儀なくされる歴史的過程において、アメリカ人の特異性が、リリー・バートという女性を通して、この作品において際立って鮮明に映し出され、それによって主人公の悲劇性を際立た

* 広島経済大学経済学部教授

せる作者の意図を、考察してみたいと思う。

[1]

第二部に入る少し前、12章の「活人画」の場面は、リリーの本質的美を表現できるクライマックスの場面である。その多様な場面は、審美的魅力を描くボッチチェリの「春」、スペイン宮廷お抱えのゴヤの作品、ヴェネチアン派のティチアーノの「娘」、ベルギー人で最後は英国宮廷画家になったヴァンダイクのもの、などスタイルの異なる画家のものをイメージしたものだった⁽¹⁾。その中でリリーが選び演出したのは、英国の肖像画、レイノルド [Sir Joshua Reynolds (1723-92)]⁽²⁾ の作品「ミセス・ロイド」⁽³⁾ だった。その活人画の終了後、リリーは次のように描写される。

Lily had not an instant's doubt as to the meaning of the murmur greeting her appearance. No other tableau had been received with that precise note or approval: it had obviously been called for the by herself, and not by the picture she impersonated. She had feared at the last moment that she was risking too much in dispensing with the advantages of a more sumptuous setting, and the completeness of her triumph gave her an intoxicating sense of recovered power. (HM p. 107)

リリーの扮する「ミセス・ロイド」は18世紀英国美術に影響を与えた作品ではあるが、その美しさは人工的なものを排除した造形である。審美眼の基本的原則と「標準」は自然を模倣することによって得られるという説を固辞したレイノルズの崇高さに対する18世紀的な理想に従い⁽⁴⁾、リリーの身にまとったのは、薄い淡い色のひだのある布であって、宝石類の人工的なものは一切身につけていない。これがまさにリリーの主張なのである。富の象徴としての宝石を排除した、素のままの彼女の自然美を映した活人画が、宝石を配した他の宮廷画に抗している。つまり資産を持たないリリーを、経済優先社会の権力への抵抗を表現する者として捉えるウォー-tonの指摘が見て取れる。

このリリーの姿を、傍観者として捕らえ、一番の理解者だと、リリー自身が考えるセルダン (Seldan) のその理解の許容範囲が、ここで問題となる。セルダンは真面目に彼女の価値を受け止めようとするが、経済的要因が介在することで、リリーの現実の姿をつかみきれてはいない。このことはセルダンが一般読者の代弁者として機能していることを意味するのではなかろうか。なぜなら、読者にはセルダン

同様語られていないからである。例えば読者は、ここでリリーの実態をつかまえようとするのだが、目や髪の色、肌の色艶、そして背の高さまで想像はするものの、⁽⁵⁾ 具体的生身の人間としてのリリーは描ききれないのである。

この実態のない具象化されないひとりの女性の型は、リリー・パートを、女性の理想像として描きたい作者ウオートンの理想の女性像へ移行する過程である。十三章にあるように、ジュディ・トレナーからの短信と信じて彼女の邸宅に出かけたが、実はジュディはいないで、そこには、夫のガス・トレナーのみが、リリーを待っている。暴力を持ってもしリリーを手にしたトレナーに、リリーは毅然として立ち向かうのである。このことはリリーのその名の示す通り、アメリカ女性の特徴である無垢を意味するものでもあり、作者ウオートンが師とするヘンリー・ジェームズから受けた忠告、“アメリカ的主題を追いかけろ”という提案の一つである、アメリカ人の無垢なる精神性を示すものでもある。その典型的無垢なる女性では、さらに完成された人間像には至っていない。その文学的昇華を求めるには、後の彼女の大作『無垢の時代』[*The Age of Innocence* (1920)] のマダム・オレンスカ⁽⁶⁾ (Olenska) の登場まで待たなければならない。

この無垢なることと表裏一体である、無知とも解釈できる精神的二面性は、リリー・パートのその後の、さまよう人生の中の様々な人間関係に映し出される。これら複雑な人間関係の悲愴傾向は、作者ウオートン自身の破滅的結婚生活の反映から生まれたものであると窺える。ウオートンの当時の不幸な結婚生活は、R.W.B. ルイスの伝記にも指摘されているように、夫テディの健康状態や女性関係と深い関連があると見なされる。そのことは彼女の正式離婚である1913年まで続くことになり、離婚後翌年の作品『イーサン・フロム』[*Ethan Frome* (1914)] には、結婚生活が囚われの身としてしか解釈できないような悲劇の登場人物にも、そのことが窺える。

このウオートン自身の囚われの身の不自由を選ばせないで、リリーの潔癖性をより際立たせるためには、自由を選択させるという仮面を被らせることで囚われの身を回避するかのようであるが、彼女が超えられない、次のような精神の状況がある。

There was a great gulf fixed between today and yesterday. Everything in the past seemed simple, natural, full of daylight—and she was alone in a place of darkness and pollution—Alone! It was the loneliness that frightened her. Her eyes fell on an illuminated clock at a street corner, and she saw that the hands marked the half hour after eleven. Only half

past eleven—there were hours and hours left of the night! And she must spend them alone, shuddering sleepless on her bed. (HM. P. 117)

リリーは一人でいることの耐えられないさびしさを恐怖と感じている。それは、ガス・トレナーに代表される社会の軽蔑と批判の対象として、彼女の美の優位性を発信してしまったという自己を認識していないことに依拠する。にもかかわらず、真意が伝わらない誤解、誹謗中傷の渦の中で、孤独をものともしないほど、自らの天賦の美へ自信が長く続くものでもないことを自覚するからこそ、リリーの寂しさからの恐怖は孤独の恐怖へと推移するのである。このリリーの逼迫した心理状態は、余りに宗教的、余りにピューリタンの行き場のない、彼女の行動様式に加速されることになる。

そうした中、ニューヨークあるいはニューポートでの俗っぽい社交界や実のない交友関係から作者はどのように主題を引き出しうるだろうか。その答えとして、この社会の持つ浅薄性が壊すものを通してのみ、その社会は劇的な意味を捕らえることができる、ウォートンの伝記作家であるルイスは指摘する⁽⁷⁾。まさに、この無関心な社会によってゆっくりとリリーが壊されていく。この作業が、作者ウォートンの実人生で、夫と彼女の精神的肉体的不調であり、それを癒すためのヨーロッパへの旅立ちで、作品の誕生さえ遅れることになるのである。

ところが、このような神経症の危機が、当時歴史的にアメリカを覆っていたことをジャクソン・リアズは次のように指摘する。

Neurasthenia was historically important not because nervous ailments has actually increased—that point is impossible to substantiate—but because observers believed nervousness was on the rise, and treated its spread as a cultural problem. Some, it is true, dismissed neurasthenia as a spurious leisure-class complaint, confined primarily to society ladies who were either too coddled or too dissipated to shoulder their duties as wives and mother. Such critics counseled rededication to duty and hard work.

More often, however, Americans viewed neurasthenia as a result of impersonal historical forces, not to be easily exorcised by injunctions to bourgeois virtues.⁽⁸⁾

上記のように1890年代のアメリカには、神経症が文化的問題として持ち上がって

いたとリアーズは見ている。それは、有閑階級および社交界の女性に広がりがあると受け止めている。それは当時出版界こぞって、アメリカ社会における精神的狂気や自殺を、取り上げ説明し、コメントしていることから窺える。⁽⁹⁾中でも気になるのは実証できないとされる神経症の危機にあり、この現象は大抵非人間的な歴史の力の結果であるリアーズは捉えているのである。

この非人間的環境、それが「歓楽の館」となるリリーの推移する行動過程の場面でもある。

第二部に入るとリリーはヨーロッパの歓楽の館を次から次へと移動することになる。ドーセット一家と共にリリーは大型蒸気船「サブリーナ号」と名付けられた船で⁽¹⁰⁾やってくる。その二ヶ月過ごした洋上での生活はリリーに次のような錯覚を提供する。

Her two months on the Sabrina had been especially calculated to aid this illusion of distance. She had been plunged into new scenes, and had found in them a renewal of old hopes and ambitions. The cruise itself charmed her as a romantic adventure... The gratification of being welcomed in high company, and of making her own ascendancy felt there, so that she found herself figuring once more as the "beautiful Miss Bart" in the interesting journal devoted to recording the least movements of her cosmopolitan companions—all these experiences tended to throw into the extreme background of memory the prosaic and sordid difficulties from which she had escaped. (HM. p. 153)

リリーの心奥深く納められている未解決の難題は今社交界の美しい「ミス・バート」の仮面を再び被されることで、一瞬隠れている。しかし作者のバランス感覚は、リリーの実在と抜き足ならない状況を忘れさせることなく指摘する。

作家ウオートンがリリーに科す課題は、自分の義務と仕事への献身である。従って、リリーに義務と仕事への献身を問いかけるならば、リリーは再びそのような脅迫観念と現実逃避との対極を漂流することになる。リリーは陽気で華麗で気楽な生活こそ、彼女の相応な暮らしと考えるのである。

そのような彼女の望む環境は、ドーセット夫妻の問題を保ちつつも、公爵夫妻を招くベカシンでの大晩餐会の成功とともに続く。しかし会の進行を観察するセルダ

ンにはリリーのその場の集団からの遊離が見えている。それはまさに晩餐が終わろうとする時、決定的になる。公爵夫人を代表とする客は次々と自動車で発って行く。しかしリリーの擁護者であったはずのドーセット夫人の「ミス・パートはヨットには戻らない」の衝撃的一言で彼女のこれから起こる転落への予兆は明確になるのである。

そして六月、ヨーロッパから戻って、叔母のミセス・ペニストンの急死によってさらにリリーは転落の方向へと投げ出される。

Lily stood apart from the general movement, feeling herself for the first time utterly alone. No one looked at her, no one seemed aware of her presence; she was probing the very depths of insignificance. And under her sense of the collective indifference came the acuter pang of hopes deceived. Disinherited—she had been disinherited—and for Grace Stepney! (HM. p. 174)

リリーへの相続金は一万ドルでしかなかった。その財産の残余はすべて従姉妹のグレース・ステップニーに渡されることになった事実は、バーサに勝つための富を失うことを決定づけた。

この事実が知らされた後、リリーは、ベルツシャー公爵夫人の擁護の下、ロンドンに行ってみたり、ゴーマー夫妻の招きでアラスカで過ごしたりする。しかしこれらの生活はすべてリリーが望むものではないことを自覚している。この窮状から脱出するにはローズデールとの結婚であるはずだが、ローズデールからその意向はないことを知らされ、結婚は果たせないことが分かる。その理由は彼らの狭い社会での風評でもあった。その彼の発言の中にリリーを 'some superfine human merchandise' (HM. p. 200) 「何か特上の人間商品」として扱っている。ここにまさにヴェブレンの言う有閑階級の考えの一部が示される。そしてそこに上りつつあるローズデールの発言が、次のように続く。

‘…Aman ain’t ashamed to say he wants to own a racing stable or a picture gallery…’. Anyhow, I want to have the run of the best houses; and I’m getting it too, little by little. But I know the quickest way to queer yourself with the right people is to be seen with the wrong ones; and that’s the reason I want to avoid mistakes. (HM. p. 200)

有閑階級に昇りつつあるローズデールの真意は、体面を誇示することしか頭にない。その表象としての根拠になるものが、競馬用の馬であり、美術画廊の所有である。そして仲間としてリリーがふさわしくないとの理由で拒絶されるのである。そのようなことで、彼は他との差別化をし、優越性を誇示したいのである。⁽¹¹⁾リリーはローズデールとの取引に負けた。

最後にリリーが行き着いた歓楽の館はエンボリアム・ホテルである。この場所が彼女に適する場でないことは、セルダンが見抜いている。やがてリリーはミセス・ハッチの下を去り、従姉妹の所に出向くがしかし、自立の気持ちは彼女をレジーナの作業室へと運ぶ。しかしそれも彼女のへまによって、続けることはできず、疲労困憊した彼女は、その帰り道の薬局で神経症の薬瓶を購入することになる。そして、いつしかセルダンに永遠の別れを告げることになる。帰り道出会うのが、ネッティ・ストラザー、旧姓ネッティ・クレインである。新興する労働者階級を代表する彼女は昔リリーに助けられたことの礼を述べ、今彼女を助けようとする。

彼女の夫は電車の運転手であり、彼女はこどもを育てながら、女工をつづけている。この社会構造の転換にリリーは気づき、ネッティの活力をうらやましく思う。人間の信頼関係で支えられた結婚生活をみて、自分にはない人間同士の絆を渴望するが、それも今では不可能であり、リリーはただ人生に終止符を打ちたいと願うばかりになるのである。

結 論

こうした厭世的人生観に変化する女性主人公の危機的状況は、当時のアメリカ社会の持つ経済社会のゆがみが大きく個人に反映したものと見なされる。女性主人公、リリー・パートは、その社会が壊してしまった、繊細な精神性を持つ一人の個人であり、作者はその彼女を壊すことで、アメリカ経済社会の変革推移する過程の意味を、捕らえようとすると考えられる。十九世紀後半アメリカ人が無垢や純粋性を持ちつづけながらも、ヨーロッパの熟成され矛盾を内包する文化を理解し、その中で「存在することの闘い」⁽¹²⁾を余儀なくした。その闘いの連続性はさらに作者ウオートン自身が、第一次世界大戦の奉仕団体として活躍する中で、ヨーロッパ文化の認知と対照を作品に反映させるのである。

注

テキストは、Edith Wharton, *The House of Mirth*, (New York, London: W. W. Norton & Company, 1990) を使用した。本文引用はすべてこの版からであり、ページ数は引用に続け

て、括弧内に入れて示す。

- (1) *The House of Mirth*, (New York, London: W. W. Norton & Company, 1990) pp. 105–106
- (2) 『オックスフォード西洋美術事典』 *The Oxford Companion To Art*, (講談社, 1989) pp. 1223–1224 ロイヤル・アカデミー初代院長で1789年失明するまでアカデミーにおける彼の権威は最高潮に達した。イギリス18世紀の資的展望をあらゆる領域において最も活発に述べ、イギリスの芸術家の地位を新しい威厳のあるものへと昇格させた。
- (3) *The House of Mirth*, p.106 また前出の『オックスフォード西洋美術事典』によると、レイノルズの理論の軸に1つは、芸術の究極と目的は道徳的な向上にあるというもので、彼は芸術に向かう態度がミケランジェロ以降、着実に悪化していると信じていた。この点において、急速に勢力をもち始めた富裕階級やそれに結びついた貴族階級の醜悪をえぐり出す彼の描出法にウォートンの鑑識眼が共感した作品としてみられる。
- (4) 『オックスフォード西洋美術事典』 *The Oxford Companion To Art*, p. 1223
- (5) Maureen Newlin 女史が1999年夏 Newport の Regina 大学で行われた Edith Wharton 国際学会で、このことに関し、Lily の美の確かな特質は特定されていないことを指摘し、彼女の生涯の目的はその美の維持に没頭することだと言っている。また、女性の美が成長する有閑階級の部分的に成り行きとして、女性の美が益々病的な固執となる時、Lily はアメリカの歴史の中で、時代の産物であるとし、この有閑階級の女性は、直接経済生産において男性をまはや助けることにはならなかったもので、彼女らの価値は益々象徴的になり、彼女らは生産者である代わりに、消費者で消費の製品にもなったとする。Elizabeth Ammons はこの経済制度の働きを描写する Thorstein Veblen の『有閑階級の論理』の読書を用意するとしている。
- (6) Olenska は1920年の女性でアメリカ初のピューリッツァー賞を取った作品の主人公のひとりと考えてもよいが、もう一人の主なる女性と共に無垢と成熟をあわせた女性としてリリーとの比較ではより完成された女性として描かれる。
- (7) R. W. B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, (Fromm International Publishing Corporation New York, 1975) p. 150
- (8) T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace Antimodernism and the Transformation of American Culture 1880–1920*, (The University Chicago Press, 1994) p. 51
- (9) *ibid*, p. 50 これらのことを雑誌, *Nation*, *Forum*, *North American Review*, *Atlantic Monthly* 等で取り上げている。
- (10) ドーセット夫妻のこのヨットはイギリスの七つの川で溺れた妖精に因んでつけられた名前である。
- (11) ソースタイン・ヴェブレンの『有閑階級の理論』 p. 106 によると、このような散財を強く求める実質的な理由は、究極的には、フランスの小土地所有者を節約と節儉にはげませ、アメリカの大富豪に大学、病院、博物館を建てさせるのと全く同様に、優越性と金銭的な体面を誇示しようという性癖に他ならないとしている。
- (12) *No Place of Grace*, p. 52.